

Special Interview

副島 淳 -そえじま じゅん-

アメリカ人と日本人のミックスルーツを持つ。生まれは蒲田、育ちは千葉の浦安という中身は日本人。現在はジャンルの垣根を越え、キャラクターを活かし、映画ドラマ、バラエティー、舞台、MC、CM等で活動中。



「本当に世界は広いんだ！」ということは伝えたいですね

——講演会事前インタビューを快く引き受けてくださり、誠にありがとうございます。これからいくつか質問させていただきますが、どうぞよろしくお願いします。

楽しみです。よろしくお願いします。

副島様は生まれたところからお父様にお会いしたことがなく、母子家庭で育ったと伺いました。そのような状況で、幼少期の思い出の中で今も心に残っている言葉や場面はありますか？

思い出で最初に思いつくのはバスケットボールとの出会いです。小学生の時はこの見た目の違いで結構辛いじめを受けてきました。その結果人間性も変わり閉鎖的になってしまいました。けれど、中学校からバスケットボールを始めたことで、本来の自分に帰っていききました。人間性や性格面が変わったというわけではなくて、本来の自分に帰ったというところがあるので、やっぱり小さい頃の思い出として大部分を占めているのはバスケットボールなんだと思います。

中学校の時のバスケットボールとの出会いというのは、性格を変えたのではなく、本来の自分に帰るきっかけをくれたというわけですね。

人生を左右するということと大げさかもしれませんが、自分の中の節目で、例えば母の言葉であったりとか、中学で始めたバスケットボールの顧問の先生の言葉であったりというのは、自分の人間形成の中でだいぶ大きな部分だと思っています。

かつての自分は引っ込み思案なところがあって、人に何か意見するとか、提案するなどの自己主張が全くなできませんでした。けれど、そんな自分をバスケットボールの顧問の先生は、チームの中心に据えてくれたんです。その時に顧問の先生にこう言われました。「副島、バスケットボールはチームスポーツだ。チームの中心である副島は意見を言わなくてはいいけない。しかし、言いつぱなしではお山の大将になってしまう。だから、自分の意見を言うときは、相手の意見も同じくらい聞きなさい。そうすればチームは強くなるし、お前という存在がもっと大きくなっていくだろう。」と。

思い出で最初に思いつくのは
バスケットボールとの出会いです

「自分の意見を言うのと同じくらい
相手の意見も聞きなさい」



引っ込み思案な自分を変えたのは、部活の顧問の先生の言葉でした

この言葉は、正直自分の中でガツンと来ました。今まではただ聞くだけだったので、それでは何もよくならない。自分の意見を言うのと同じくらい相手の意見も聞くということ。その先生に教えてもらって、それが今の芸能活動や仕事にも通じるものがあるのかなと思います。

そうなんです。中学のバスケットボールの顧問の先生というのは、人として素晴らしいことを教えてくださった方だったんですね。

そうです。中学1年生の頃は先生の頃にはなかったんですけど、2年生の頃に赴任してきて、バスケットボールに情熱を注いでいた方でした。その先生に出会わなかったら中学でバスケットボールを辞めていたかもしれない。その先生のおかげで僕も周りも強くなれました。自分自身も高校・大学とバスケットボール推薦で進学できたので、その先生との出会いはめちゃくちゃ大きかったですね。

その先生は、副島さんにとっての「原点」のような方なんです。



自分の違いを言われたときは、どん底に突き落とされるようだった

では続いて次の質問になりますが、小学生のころに経験された「見た目の違い」を理由としたいじめで、特に心に刻まれている出来事などあれば教えてくださいませんか？

最初に言われた言葉ですね。自分の見た目の容姿について「汚い」とか「臭い」とか「気持ち悪い」とか言われました。最初に言われた言葉というのは、すごく自分の中では刻まれているというか、トラウマですね。言われるまでは、自分の中でそう思って生きていなかったのですが、すごく衝撃的な言葉でした。一番最初に自分の違いを言われた時は、未だに思い出します。どん底に突き落とされるような、叩き落とされるような、すごく衝撃的だったことを覚えています。

最初の頃というと、小学生に入っていた頃でしょうか？

小学4年生の頃ですね。転入した先で、そういった言葉の数々を浴びせられました。10歳前後で言われたので、その時の最初の言葉の数々というのは自分の中で深く刻まれています。

心にもないことを言われてしまうと、一番最初の傷というのは、フラッシュバックしてしまうこともありますよね。

そうですね。結構きつかったです。

そのような辛い状況の中で、逃げ場や支えになったものは何でしたか？

それがやっぱりテレビだったんですよ。当時はずっとふさぎ込んでいたので、笑うとかポジティブなプラスのエネルギーというものはまったく働かなかったんです。周りともまったく人間関係も構築できなかったもので、ずっと一人で、学校に行ったら目立たないように目立たないようにに隅っこにいて。みんなと目を合わせるのも怖くなってしまったんです。でも、家に帰って一人でテレビのバラエティ番組とか見てると、ちょっと笑えたりとか、明るい気持ちになれました。なので、テレビの力はだいぶ支えになったと思います。今はもうだいぶ慣れましたけど、未だに時々思い返しますよ。憧れの的だったテレビの中に自分がいることに、たまにちょっと不思議な感覚に陥る時があります。

辛いときに、自分を励ましたり、心を変えてくださったような方々と共演できた時というのは喜びが？

もう喜べないですね（笑）毎回もう滅茶苦茶緊張してます。超ミハハ！なんで！自分で言うのもなんですけど、めっちゃめっちゃミハハ！人間なので、やっぱり未だに感動してしまいます。すごいですね。皆さん生きているんですね。

バラエティ番組を見てると 明るい気持ちになりました



本当ですよ。テレビの向こう側となりますと、同じ人間のはずですが、別世界の人間のようにですよ。



では最後の質問になりますが、今同じように見た目ですとか、いじめで悩みや孤独を抱えている子どもや若い世代に、どんな言葉を届けたいですか？

今回の公演のタイトルにもなっていますが、僕は数年前に本を出版させてもらいました。その時にタイトルをどうしようかと話していた時に、編集の方に言われたんです。「当時の10歳前後の自分に何かかけたい言葉はありますか。」と。その時に出てきたのが「今、君のいる場所が世界のすべてではない」という言葉でした。

これって自分も当時は小学校が世界のすべてのように感じていたからなんです。地球全体のような。本当は小学校ってちっぽけなクラスですよ。それこそ人数は20数名しかいません。それが全世界の人々の意見のように感じてたんですね。なのでクラスの人から言われる言葉というのは、小学校を出てもみんな同じように思っているんだと、世界共通の意識・意見なんだと陥っていました。でも、何度も言うように本当はそれってちっぽけなんですよ。グーグルのピンのような。

もし今いる環境が辛かったり逃げ出したかったら

全然逃げても良いと思うんです

世界は本当に広いので、もし今いる環境が辛かったり逃げ出したかったら全然逃げてもいいと思うんです。というのも、僕も逃げていたので。環境を変えるまではいけなかったですけど、環境の中でもがきながら逃げていた。環境を変えろ。たといえど、僕の時代にはなかったけれど、ネットの世界に逃げてもいいです。自分のメンタルが上がるなら。でも、人を攻撃するとかは良くないですよ。ネットはいろんな使い方ができますから、そうした世界へ逃げてもいいです。し、環境を変えてまた違うところに行ってもいい。今いる環境だけがすべてではないと思うので、いろいろと自分の中で、何とか前を向いて視野を広げて自分が行ける環境に身を置いてほしいなと思います。今辛くても、その今いる場所って決してすべてではないんです。世界は本当に広いですし、まだ見ぬ世界は多々あるので、そういったところにどんどん自分で逃げてもいいと伝えたいですね。当時の自分にも言いたかった言葉です。

なるほど。ご自身が10歳の頃の自分に伝えるとしたら…

そうですね。本当に今いる場所が世界のすべてではないよって伝えたいですね。

「今、君のいる場所が世界のすべてではない。」

そうしたらちよつとだけ希望が、そんなにいきなり視野が明るくなるとか環境が明るくなるとかではないと思います。ちよつとだけ。頑張るという言葉も僕からしたらプレッシャーだったと思うんで、じゃあちよつとだけ生きてみようかなとかちよつとだけまだ歩いてみようかなとか思える一つのきっかけになるんじゃないかなと思います。本当に世界は広いんだということは伝えたいですね。



——ご自身の体験からの貴重なお話し、誠にありがとうございます。これにてインタビュは終了となります。副島様のさらなるご活躍をお祈りいたします。



何とか前を向いて 視野を広げて 自分が行ける環境に 身を置いてほしい